

29G-pm14

PBL とシミュレーションを組み合わせた薬剤アナフィラキシーに対する対応の教育の試み

○尾山 治¹, 杉山 朋美¹, 高野 克彦¹, 毎田 千恵子¹, 野村 政明¹,
多田 昭博¹, 中川 輝昭¹(¹北陸大薬)

【目的】薬剤師は薬の副作用につき十分な知識を持ち、現場での対応に積極的にかかわっていく必要があるが、このための学部教育は不十分である。今回、アナフィラキシーショックから心停止に至った患者に対する治療と薬剤師の関与につき、PBL とシミュレーションを組み合わせた演習を行ったので報告する。【方法】高度医療薬学演習コースを選択した5年生 76名を対象として半日×4日間を使用して行った。初日には、「薬剤師として造影剤を払い出しにCT室へ行き、造影CT撮影を見ていたところ、患者が嘔吐し、居合わせた放射線科の医師が診察すると、脈を触れなかった」との設定にて、「この患者に行われることを列挙せよ」とのテーマを与えた。2日目と3日目には入れ替え制で、PBLとして、「現場には薬剤師、放射線科医、放射線技師の3人」との設定と、実際に患者に行われた処置を与え、「それぞれの職種が果たせる役割」と、「この現場で薬剤師ができること」という課題でPBLを半日行った他、ALSシミュレーターを用いたアナフィラキシーショックと心停止のシミュレーション、バイタルサイン測定の実習をそれぞれ約1時間で行った。4日目にはPBL部分の発表会を行った。終了後、4日間のプログラム全体および実技部分につきアンケートを行った。【結果と考察】1日目にはすべてのグループが造影剤アナフィラキシーとの状況判断に至ったが、心停止と判断できたグループはなかった。処置を提示した後はすべてのグループが心停止に対する処置を調査できた。アンケートでは、実習部分に関してはほぼ全員がやや満足以上で、実務実習以前にこれらの手技を体験したかったと回答した。また、PBLに関してもおおむね満足との回答であった。PBLとシミュレーションによる体験の組み合わせで、現場で必要な知識の習得が可能であると考えられた。